

明治 45 年

| | | | |
|---------|----------|---------|---------|
| 橋 藤 左エ門 | 小野寺 シノ | 藤 沢 又 八 | 吉 田 喜三郎 |
| 小野寺 房 吉 | 小 野 長左エ門 | 高 橋 貞二郎 | 松 浦 コギク |
| 安 田 源十郎 | 菊 地 久 七 | 安 道 利吉郎 | 高 橋 吉太郎 |
| 斉 藤 久 | 水 沢 五郎助 | 清 水 宏 重 | 福 井 藤 助 |
| 小 林 喜代治 | 石 原 小三郎 | 樋 口 タ ヨ | |

大 正 2 年

| | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 森 山 岩 蔵 | 谷 川 万次郎 | 安 田 太 吉 | 所 庄三郎 |
| 小 松 米 吉 | 長 岡 直 吉 | 波 木 太一郎 | 橋 井 小伝次 |
| 板 垣 竹 蔵 | 児 玉 伊 八 | 小 原 惣太郎 | |

大 正 3 年

| | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 橋 井 留 七 | 小野寺 喜代治 | 三 上 恒之進 | 箕 浦 久四郎 |
| 遊 塚 弁 蔵 | 尾 名 大 蔵 | | |

大 正 4 年

| | | | |
|---------|---------|----------|---------|
| 窪 田 正 作 | 佐 藤 正 治 | 小 山 安右エ門 | 高 橋 喜代治 |
| 土 田 宇三吉 | 喜 井 菊 治 | 本 田 柳 海 | 松 浦 栄 |

大 正 6 年

西 川 藤 作

大 正 7 年

菊 地 勇五郎 松 浦 浪次郎 高 橋 藤 吉

児 玉 定 雄 氏 を 訪 ね て

「こんにちは、今日伺ったのはこの地帯の開拓当時のことをお聞きしたいと思ひまして」
「それは御苦労さまです。」

と言葉を返されたのは、佐幌23区の児玉定雄さん（81歳）です。

佐幌というのは普通佐幌小学校々下の地帯をいい、それより北5キロ程行った上佐幌小学校々下の地帯を上佐幌と呼んでおりますが、行政上の呼び方は佐幌高台をやや2分して清水町の区域を下佐幌、新得町の区域を上佐幌と称されております。



これは、もともと人舞村当時、村を同じくしていた呼び名をそのまま、踏襲しているものと思われます。「私は、佐幌で生まれ佐幌で育ったものですから、現在屈足におりましても私の本当の故郷ですのでこの地帯の古いお話を伺いたいと思ひまして」

「私は父母とともにこの佐幌へ来たのは明治43年私が小学校2年生のときでした、両親と兄達は、明治34年に現在の帯広西5条北1丁目に岐阜県より入地、それより芽室町上伏古、現在の（共栄）に住み、私はそこで生まれました、開懇は馬を頼りにプラオの2頭引を用いましたがそれまでの段取りはいわゆる開拓の7ツ道具で人力そのものでした、手に豆が出来るのは最初の頃でたこが出来れば1人前といわれました。

「困ったとか苦しかったことの印象に残っていることを話してくれませんか」

「大正元年と2年と続いて天候不順のため凶作となり食料難に陥りました、そのときキヤベツのしんは勿論根まで食べたことがあります」

「その当時冷害対策とか救農作業というものは何かありましたか！」

「よく覚えておりませんが小学校で消しゴムをもらったことがありました。救農で覚えているのはその後のことで、部落の主要道路に佐幌川から砂利を運びました、それもバチバチでなく巾80センチ長さ2メートル程の普通の櫓でそれに畳1枚位の底の深さ30センチから40センチの箱を取り付けてそれに1パイ入れれば1合バラスといったものです、その仕事も何日もあった訳けでなく収入は微々たるものでした」

「賃金はいか程になったのですか」

「もう忘れてしまいましたが入夫で1円位、馬で3円だったでしょうか、その頃お酒1升1円から1円20銭、しょう油50銭玄米1俵60キロ7円から8円という頃でした」

「私が大正12年に佐幌小学校入学した其の当時、チョンマゲの方が佐幌におられましたね確かヨシの爺さんといわれていたと思いますが」

「そうです吉家の爺さんですよ行商したりひき臼の目立てをしたり生活のためには老人も一生懸命でしたよ。その息子に万五郎さんという方がおられましたが街へ雑穀を馬車で売りに行き踏切事故で亡くなり幼い子供4人も残してのことなので、お爺さんは郷里の岩手県から二男の仁五郎さんと呼んで後入りしましたね、仁五郎さんも晩年は人舞へ移転して自分の息子さん方と暮らしておりましたがその後の消息は私も分かりません」

「^{ながと}長藤静祐さんという方をご存じですか、記録によると明治39年に入地しておりますが！私も子供心にかすかに覚えております、私の寺の前を籠に天秤棒を担いで通っている姿を度々見ました」

「長藤さんは東1線3号ぶちで私の家から近く、夫婦2人暮して息子さんが帯広の方におると聞きましたがおったことはありません、長藤さんは元はおさむらいさんで近くの青年に剣道を教えておられました」

「天秤棒は何んだったんですか」

「桜や果樹の苗木とか食べものも行商しておりましたね」

「長くおられなかったようですが」